

## ワークショップ3

# 大学とダイバーシティ

### 報告者

田中 共子 氏      岡山大学 社会文化科学学域 教授

岸 磨貴子 氏      明治大学 国際日本学部 教授

### コーディネーター

坪井 剛 氏      佛教大学 仏教学部 准教授

塘 利枝子 氏      同志社女子大学 現代社会学部 教授

## 大学とダイバーシティ

コーディネーター

同志社女子大学 現代社会学部 教授

塘 利枝子

佛教大学 仏教学部 准教授

坪井 剛

---

---

### ○本ワークショップのねらい

京都は以前から留学生の多い地域であったが、最近はさらに留学生数が増加しており、様々な文化的背景をもつ学生との交流が大学教職員に求められている。日本語を母語とする学生だけではなく、多様な言語、宗教、文化をもつ学生と関わり、大学内のダイバーシティを尊重する姿勢をもつことが、今後の大学の発展にとっても必要であろう。多様な人材を育成する大学において、異文化とどのように向き合っていけばよいのか。このことを考えていくために、大学の授業や日本人学生と留学生との交流イベントで簡単にすることができる異文化間教育に関するワークショップを紹介するとともに、実際にワークショップを体験して、想像性を働かせながら新しい価値観を創造する楽しさを参加者と共有することを目的とした。

### ○報告の概要

前半は田中共子氏（岡山大学社会文化科学学域 教授）より、「留学交流の場で使えるワークショップの方法」と題して、異文化間教育の立場から、留学生などとの様々なワークショップの方法をご紹介いただいた。

まず、ワークショップを計画する際には、設定（機会・対象・目的）や担当（講師・補助者・使用言語）・環境（会場・物品・資料・配布物・広報・報告）などをトータルで考えておくべき必要があることを指摘された。また、同じく計画する際に意識しておくべき背景モデルとして、①人間・集団・個人からなる人間理解の三層モデルと、②3段階（文化への気付き・理解・対処）と2レベル（文化一般・文化特定）の計6セルからなるAUC-GS学習モデルを紹介された。特に前者においては、三層をバランス良く認識しておくことが大切であること、後者については、個々のセルに関する説明やワークショップ、エクササイズであっても、全体の構造の中でどの位置に当たるのかということの説明した上で実施するのが望ましいことに、それぞれ注意を促されている。

続いて上記、AUC-GS学習モデルの6セルに対応するエクササイズの例とその効果・注意点について、それぞれ説明された上で、その一つである「認知地図課題（AGセル）」を参加者全員で試みた。その手順は以下の通りである。まずワークシートの枠内に何も参照しないで世界地図を描いてもらった上で、実際の世界地図と比較し、同じところや違うところを探していく。次に、他の人たちが描いた地図と見比べて、共通点や異なっているところを見つけ、話し合うというものである。ここで、これらの相違点が何を表したもののなのか、という問いを投げかけることで、受講生は自身の持っている世界認識を振り返るとともに、世界には自分の親しんでいる場所以外にも多くの地域があり、他の文化と出会う可能性があることに改めて気付いてもらうことができると説明された。

最後に、実際にワークショップを運営していく際には、形態や構成・学習内容といった面で運営の工夫が必要であり、そのプランをまとめておくことでスムーズな実施が可能であるとして、計画シートの一例をご紹介いただいた。

後半は岸 磨貴子氏（明治大学国際日本学部 教授）より、「アートと共創でひらくキャンパス多様性」と題して、実際にワークショップを実施していただいた。最初に行ったのは、「マッピングミー」というアクティビティである。これは「いま・ここ」を世界の中心とする地図をイメージし、「出身」「大事な場所」や「将来行ってみたい場所」などをテーマに、参加者が自身の居場所と考える位置へ移動してもらうというものである。移動した後に、近くの参加者とコミュニケーションを取ることで、互いの共通点を見出したり、自身のストーリーを紡いだりすることができる。こういった身体性を伴ったアクティビティを行うことで、参加者の姿勢を開くことができるとともに、新たな視点でカテゴリーを生み出し、他者を知ることが可能となることが説明された。これに関して参加者からは、「ワークショップには苦手意識があったが、やってみると楽しめた」や「自分がこんなにしゃべるとは思わなかった」といった感想が寄せられた。

続いて、改めて本ワークショップの概要についての説明が行われた。具体的には、本ワークショップではアート手法を経験しながら、「他者」や「文化的・社会的背景」を深く理解する新たな方法論を提示することで、より豊かなキャンパスコミュニティの創造を目指すものであるというものである。そして、カテゴリーで他者を理解することには利点がある一方で、個人の多様性が見落とされてしまうという課題もあることが指摘され、パフォーマンス的なアプローチを行うことで、新しい価値や意味を作ることができること、それによって、全員にとってちょうど良い・快適な場を作ることが可能となることが示された。

このことを実際に理解していくため、続いて「一筆書きで自己紹介」というワークに移った。これは、自分の強みを「一筆書き」で表現し、ペアとなった参加者からその絵について質問してもらうというもの。実際に行ってみると、質問に回答することで、描いたときには考えていなかった絵の意味や自身の強みを見出すことができ、また、ペアとなる相手によって話す内容も異なることに気付かされる。ここから、多様性が他者との関わりの中から生まれてくるものでもあることや、相手が話したいと思える質問をすることも、多様性を考える重要なヒントになるのではないかとまとめられた。参加者からは、「改めて業務の中で他者の話を聞くことが重要であると感じた」や「実は雑談が大切なのではないかと思った」という感想が共有された。

続いて「100%京都FDフォーラム」というアクティビティを行った。これは、他者が作った問いに対して、YES / NOに分かれ、そのテーマについて参加者が自分の意見を物語っていくというものである。実際に参加者からは「日本の大学は男性社会であるか」「学内で声の大きい人の意見が尊重されすぎているか」「同じ職業を男女別に考える必要はあるのか」「勉強が好きではない子は大学に進学すべきではないと思うか」といった問いが出され、これに対し様々な意見が出された。ここから、実は同じ立場でも意見が違ったり、違う立場でも共感する点がありうることを体験することで、そこから多様な気づきや発見を生み出していくことが可能となることが示された。実際に参加者の意見にもYES / NOだけでは割り切れない意見が多く見られた。

最後にコーディネーターの塘 利枝子氏から、刻々と変化してく世界の中で、多様な他者とどう生きていくべきか、このことを考えていくことが重要なのではないかと総括され、本ワークショップは終了となった。

第 30 回 FD・SD フォーラム 2025.3.2 龍谷大学 深草キャンパス

ワークショップ 3 大学とダイバーシティ 14:00-16:30

報告者 田中共子 (岡山大学) 「留学交流の場で使えるワークショップの方法」 14:15-15:00  
tomo@cc.okayama-u.ac.jp

参考書 『異文化接触の心理学－AUC-GS 学習モデルで学ぶ文化の交差と共存－』  
(田中共子著、2022、ナカニシヤ出版)

異文化間教育の立場から、留学生とのワークショップの方法を紹介する。留学生を送り出す立場、受け入れる立場に役立つ試みも取り上げていく。

1. 留学交流の場とワークショップの計画
  - ・設定：機会、対象、目的
  - ・担当：講師、補助者、使用言語
  - ・環境：会場、物品、資料、配布物、広報、報告

2. 背景モデル (モデル出典は上記参考書)

- ・人間理解の三層モデル

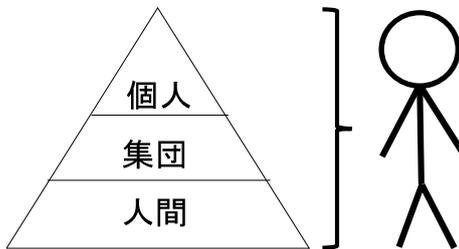


図1 人間理解の三層モデル  
人は人間として、集団として、個人としての特徴の三層が重なっている

- ・AUC-GS 学習モデル

		レベル	
		文化一般 Culture General	文化特定 Culture Specific
段階	気づき Awareness	<b>AG</b> 異文化の存在への気づき	<b>AS</b> 自文化を含む特定文化の存在や影響への気づき
	理解 Understanding	<b>UG</b> 異文化接触一般現象の知識と理解	<b>US</b> 特定文化における適応・不適応現象や特定文化自体の理解
	対処 Coping	<b>CG</b> 異文化接触一般に求められる対応の仕方の原則	<b>CS</b> 特定文化の文化的特徴に関わる対応の仕方

3. 異文化間教育と心理教育

- ・アクティブラーニング
- ・ワークシート方式
- ・エクササイズ例
  - AG:認知地図
  - AS:移動想定課題
  - UG:伝達課題
  - US:事例分析
  - CG:ホスト版文化アシミレーター
  - CS:ゲスト版ソーシャルスキル学習

3. 運営の工夫

- ・構成：グループ、討論、発表
- ・学習：課題、解説、質疑、総括、応用
- ・形態：対面、オンライン

4. まとめ：試作プラン

- ・設定 題 \_\_\_\_\_  
対象と人数 \_\_\_\_\_  
目的 \_\_\_\_\_
- ・担当 講師 \_\_\_\_\_  
補助者 \_\_\_\_\_  
使用言語 \_\_\_\_\_
- ・環境 会場 \_\_\_\_\_  
準備物 \_\_\_\_\_  
広報 \_\_\_\_\_
- ・エクササイズ \_\_\_\_\_
- ・運用の工夫 \_\_\_\_\_
- ・備考（課題、準備） \_\_\_\_\_

# 2025



明治大学  
国際日本学部  
岸 磨貴子

## 大学とダイバーシティ

### アートと共創でひらくキャンパス多様性

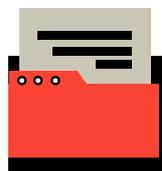
はじめに

ミニ講義

ワークショップ

振り返り

Q&A



はじめに：15:05-15:20

#### 本ワークショップの目的

本ワークショップでは、アートベース・リサーチを取り入れながら、大学における多様性の価値を（再）発見し、それを活かした学びの場を共に考えます。キャンパスには、異なる文化・価値観・経験を持つ学生たちが集い、出会い、学び合う可能性が無限に広がっています。本ワークショップでは、そんな「多様だからこそ生まれる学び」をデザインする方法を、遊び心と創造力を大切にしながら探求していきます。参加者の皆さんには、協力しながら新しい視点を発見し、想像力を刺激し合う体験をしていただきます。さらに、その対話の中で生まれた気づきをもとに、自分の教育・支援の現場でどう活かせるかを考え、実践につなげるヒントを見つけていきましょう。

#### アートベース・リサーチとは？

アートベース・リサーチ（Arts-Based Research：ABR）とは、アートの手法を活用して「見えにくいもの」を捉え、新たな問いや気づきを生み出す探究のアプローチです。ABRを通して、言葉だけでは捉えきれなかった「違い」や「つながり」への理解を生み出すことができます。本ワークショップでは、ムーブメント、ビジュアルアート、演劇の3つのアートのジャンルを使った活動を体験していただきます。大学という多様な価値観が交差する場において、ABRは学生同士の対話を促し、協働を深める実践としても有効です。学生が自身の経験を表現し、他者と共有することで、共に学び合う関係を築くことができます。また、こうした創造的なアプローチは、より包摂的で対話的な学習環境をデザインする手がかりとなるでしょう。

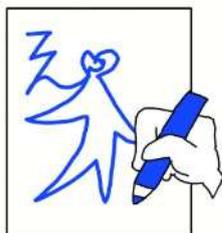
## プログラムの内容 15:20-16:20

### Mapping ME (10分) ムーブメント



「育った場所は？」「あなたの人生を変えた場所は？」  
いま・ここを世界の中心にした地図の上に、自分の場所を探して  
いきます。そして、その場所で経験した自分の物語を紡ぎ出して  
いきます。近くにいた人と話してみると、思わぬ共通点がでてく  
るかもしれません。

### 一筆書きで自己紹介 (20分) ビジュアルアート



「あなたの強みを一筆で書いてください。」  
一なぜ、この部分はとんがっているの？  
一頭の部分がハートの形なのはなぜ？  
このように問いかけ、書いた人は必ずそれに何らかの意味を付け  
て答えていきます。たくさん問いを出せば出すほど相手のことを  
知ることができる自己紹介です。

### 100%フォーラム (30分) 演劇手法+ストーリーテリング



100%TOKYOをもとにしたドキュメンタリ演劇です。参加者がつ  
くった質問にYES/NOに分かれ、そのテーマについて物語ってい  
きます。同じ立場でも意見が違ったり、違う立場でも共感した  
り、多様性から多くの気づきや発見を生み出していく活動です。  
参考映像：ⓂF/T13 『100% トーキョー』 リミニ・プロトコル

※時間があれば、他のさまざまな活動を紹介します。

## 参考文献

パトリシア・リーヴィー（著）岸磨貴子・東村知子・久保田賢一（訳）（2025）『研究法がアートと出会う時—アートベース・リサーチへの招待』，福村出版

本書は、ビジュアルアート、小説、詩、ダンス、映像、音楽などさまざまなアートのジャンルをつかった「創作」を通じた他者理解、異文化の探究の事例が紹介されています。